

(国立大学法人用)

平成29年度「学校における交流及び共同学習を通じた障害者理解(心のバリアフリー)の推進事業」成果報告書

団体名

国立大学法人愛知教育大学

I 概要

1 事業の概要

- 1 モデル地域の概要
愛知教育大学附属岡崎小学校 児 童 数 582 名 教職員数 28 名
愛知教育大学附属岡崎中学校 生 徒 数 479 名 教職員数 27 名
愛知教育大学附属特別支援学校 児童生徒数 61 名 教職員数 31 名
- 2 事業の目的
 - ・ 障害のある児童生徒とない児童生徒が、ともに運動する方法を追究する児童生徒の育成
 - ・ 実践の結果を地域に示し、地域の障害者理解の取組として発展させること
- 3 事業の目標
 - ・ 低い年齢段階から体験的に障害に対する理解を深める
- 4 事業の内容
 - ・ 障害のある児童生徒とない児童生徒が運動を通じた交流を行うことにより、障害のある児童生徒の特性を理解した肯定的な態度が形成されるよう支援する。
 - ・ とともに運動する方法を追究することについて児童生徒の取り組んだ経過を分析して提示する。
 - ・ 取り組んだプログラムの難易度を分析し地域の活動への指針とする。

2 事業の成果

- ア 「体づくり」運動を通じた交流
附属岡崎小学校3年1組(34名)と附属特別支援学校小学部(5名)との共同学習
「跳んで 投げて 引っ張って みんなで遊ぶよー スポーツランドー」
- (1) 目 標
 - ・ 「体づくり運動」を通じた交流を行うことで、障害のある子供の特性に目を向けられるようにしたい。
 - ・ とともに運動を楽しむ方法を追究するなかで、自分からすすんで交流できるようにしたい。
 - (2) 取り組みや実施の工夫
 - ・ 昨年度実施したエアマットを使った運動に取り組むことで、経験を生かしながら安心して活動できるようにした。
 - ・ 投げる運動、力試しの運動の場を設定し、児童が自らの興味・関心のある場を選択しながら様々な運動に挑戦できるようにした。
 - ・ 自分の名前をひらがなで書いたガムテープを体操服の胸に貼ることにより、互いに名前を呼び合いながら交流できるようにした。
 - (3) 成果
 - ・ 両校の児童とも経験のあるエアマットを取り入れたことで、安心して活動を始めることができ、互いに動きを真似したり、新しい動きに挑戦したりする姿が見られた。

- ・ エアマットでは、後半から一緒に跳ぶ楽しさを味わおうと2人組や集団で跳ぶように働きかけたり、エアロールの上でバランスをとる特別支援学校の児童の安全のために、エアロールを補助したりする姿が見られた。
- ・ 投げる運動では、附属特別支援学校の児童にボールを投げてリングに入れて遊ぶ楽しさを伝えるために、見本を見せたり、ボールを渡したりして、粘り強くはたらきかける姿が見られた。附属特別支援学校の児童がリングにボールを入れるたびに、拍手をして動きのよさを認める姿が見られた。
- ・ 力試しの運動として行った綱引きでは、集団での活動であったが、特別支援学校の2名の児童と一緒に取り組むことができた。少ない時間であったが、新たな運動領域においての交流の可能性を探ることができた。

イ 「ふれあいゲーム」交流・ふれあいを通じた運動遊び

附属特別支援学校高等部の生徒（10名）と附属岡崎小学校3年3組との共同学習

「紅白玉合戦 ― 附属岡崎小学校のおともだちといっしょに ―」

（1）目 標

- ・ 附属岡崎小学校の児童との交流を通じて、卒業後、居住地域や就労先などで、自分の周りにいる人と、自らかかわることのできる生徒にしたい。
- ・ 附属岡崎小学校の児童と一緒に活動することで、人からの働きかけを受け入れることができる生徒にしたい。

（2）取り組みや実施の工夫

- ・ 保健体育の時間に夢中になって取り組んだ紅白玉合戦をまたやりたいという、附属特別支援学校の生徒の願いを取り上げた。
- ・ 附属岡崎小学校の児童と交流することを事前に伝え、お兄さん、お姉さんとしてできることを考え、実践できるようにした。
- ・ 他の行事で附属特別支援学校の子供たちと交流していた3年3組を招いたことで、附属特別支援学校の子供たちが安心して一緒に活動できるようにした。

（3）成果

- ・ 年間を通じて、附属岡崎小学校の3年3組と交流したことで、附属特別支援学校の生徒は、落ち着いて附属岡崎小学校の児童と一緒に活動に取り組むことができた。
- ・ ゲーム中に、附属岡崎小学校の児童がボールを差し出すと、附属特別支援学校の生徒が受け取る様子が見られた。
- ・ 附属岡崎小学校の児童は、附属特別支援学校の生徒が数を数えたり、待機場所に座ったりするまでに時間がかかり、長時間待つことになったが、急がせることなく、附属特別支援学校の生徒が動き出すのを待つことができた。
- ・ ゲームの勝敗が発表されると、附属特別支援学校の生徒が勝ったことに喜び、ハイタッチをするために附属岡崎小学校の児童に近づくと、附属岡崎小学校の児童が手を差し出し、笑顔でハイタッチする様子が見られた。

ウ 特別支援学校の生徒との交流を目ざしたスポーツ活動の企画運営

附属特別支援学校（中等部）と附属岡崎中学校（希望者）の交流運動会

（１）目標

- ・ 附属特別支援学校（中等部）と附属岡崎中学校が、共に体を動かし楽しむことで、互いの理解を深める。

（２）取組や実施の工夫

- ・ 附属特別支援学校運動会に参加を希望した附属岡崎中学校の３名の生徒が、交流運動会の企画運営を行った。
- ・ 附属特別支援学校の生徒が楽しめるように、一人一人への案内状作成、障害物リレーのコース設定、チーム分け、表彰などを考えた。
- ・ 附属特別支援学校の生徒が校外による活動を増やすために、附属岡崎中学校体育館で実施した。

（３）成果

- ・ 附属特別支援学校と附属岡崎中学校の生徒が、分け隔てなく障害物リレーに取り組み、楽しむことができた。
- ・ 附属岡崎中学校の生徒とかかわることで、附属特別支援学校の生徒から、普段の学校生活では見せないうれしそうな表情や積極性が見られた。
- ・ 附属岡崎中学校の生徒は、附属特別支援学校の生徒を交流運動会に招待するにあたり、準備や支援の面で不安があったが、臆することなく臨機応変に活動し、達成感を味わうことができた。

３ 事業の課題とその解決のために必要な取組

- ・ 各校主幹教諭を中心にして日程について連絡調整を行った。実践に関しては、実務者レベルである教諭同士が連絡を取り合いながら、ねらいを明確にした交流を行った。一方で、実務者としての打合せも細かな日程の調整にとどまり、相互の児童生徒理解が不十分であった。そのため、ねらいと教師支援がうまくかみ合わないことがあった。相互の児童生徒らの理解を深めることができるように、児童の顔写真や簡単なプロフィールを作成し、事前打ち合わせを行うとよい。モデル地域の三校は、平成29年度も共生教育（インクルーシブ教育を展望した小、特支、中の連携による教育活動）を推進し、運動以外の共同学習も展開していたため、今後修正を加えながら、より充実したものにしていく必要がある。
- ・ 交流及び共同学習を行った学級では、障害のある児童生徒への意識の変容があったと言える。対して単発で交流を行った学級は、理解を深めるまでに至らず、自分たちで運動を楽しむ姿が見られた。交流を続けた学級が、その気づいたよさや学んだことを発信できる場面を設定したい。
- ・ 日程調整を行った主幹や実務者レベルで実践を行った教諭には、心のバリアフリー教育を持続、発展させる意義を感じることができていた。附属特別支援学校の児童生徒数が少ないため、附属岡崎小、附属岡崎中全ての児童生徒に交流、共同学習の場をもつことができなかった。多くの児童生徒がかかわれるような実践も展開し、より多くの子供たちがかわることができるようにしたい。